



龍族

नागा लोक

第 5 号

南天会
平成 27 年
12 月 7 日

大改宗式@インド・ナグプール

今年も十月二十日から三日間、ナグプールの改宗広場にて改宗記念祭が行われました。本年度五十九回目になるこの記念祭は、一九五六年にアンベードカルによって執り行われた最初の改宗式以降、アンベードカル協会によって毎年開催されてきました（アンベードカルは第一回の改宗式の二ヶ月後に急逝）。このインド仏教徒にとって最大にして最重要な式典の会長に、今年佐々井師が任命されました。

しかし、佐々井師は昨年の危篤以降、体調が優れないことが多く、その大役が務まるかどうかご本人も憂慮されていましたが、結果的に気力で乗り越え、その前の体調不良が嘘のような振る舞いでその任を果たされました。

南天会事務局（小林）は二十日にナグプール入りしました。今年には日本から、アンベードカル・エンゲージドブツデイズム研究会、関根康正教授と教授のゼミ生四人、他出版、インターネット等のメディア関係者が四人（うち南天会会員一名＝大谷力）とナーランダ大学の中村晃朗（南天会）が現地入りました。

メディア関係者が佐々井師に面会した際、近頃食欲不振でインド食が体に





受け付けないと訴えられていたため、急遽、きゅうりや大根の浅漬けや煮物などの日本食を作り佐々井師に食べていただく、体調は急速に回復し、声のほりももどり、一同安心したとともに、インド人の世話だけでなく日本食

の調理等、日本人の世話が必要であることを切実に感じました。

改宗広場では例年通りに改宗が行われ、佐々井師は長時間に渡り先頭に立ち、改宗式を行いました。今年の改宗者はグジャラート、マディヤプラ

デシユ、オディシヤ州など、いずれも改宗禁止法のある州からの改宗者が多く見られました。この他、改宗記念祭では国際仏教者会議、二十二日午前九時の二十二の誓いの全体唱和、夜のゲストスピーチなどがあり、そのすべてに参加されました。



関根康正教授

国際仏教者会議では関根教授がスピーチされ「インドの差別の実情の根深さに心を打たれています。日本にも同じ差別問題があり未だに解決していません。みんなが苦しんでおられる差別は他人事ではありません。この改宗式はみなさんに大きな恩恵と自由と平等を必ずもたらすでしょう。みなさまの平等と自由への戦いは必ず勝利しなければなりませんし、必ずそのようになるでしょう。」との言葉に会場では大きな拍手がおこりました。



マハーラーシュトラ州首相と握手を交わす佐々井師

して高野山にアンベードカル像が設置されたことにふれ、ナグプールにおける仏教徒の重要性と佐々井師活躍を讃え、演説後に佐々井師と堅い握手を結びました。

佐々井師は今年、満八十歳となり、ナグプールの仏教関係者の中でも仏教復興運動の現実を体験的に知る数少ない最古参の一人となっています。そのため、近年は以前よりもまして、さらに重要な存在として畏敬されているという印象を受けます。またマンセル遺跡への内外からの評価は年々高まりつつあり、ナーガルジュナとの関連性が学術的に論じられるようになりました。南天会ではマンセル遺跡の発掘継続と周辺地域の佐々井師の建立した寺院の保存への協力を具体化していきたいと考えています。

また、佐々井師の体調管理について、現在、身の回りの雑務を助ける役割として日本から南天会員の派遣を検討しています（第一回派遣十二月下旬、滞在期間二ヶ月予定）。今後も一ヶ月交代で派遣していきたいと考えています。（詳細は巻末にて）

（小林三旅）

アンベードカル博士記念碑除幕

9月10日 於高野山大学

延期となっていた高野山大学のアンベードカル博士記念碑除幕式が、九月十日に行われました。インド・マハラシュトラ州と和歌山県が取り交わした経済交流の覚書により、アジャンタ、エローラと高野山という共に仏教に関する世界遺産を有する両自治体の友好

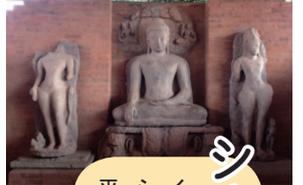


の証としてインド側から贈られたもので、当日はマハラシュトラ州首相、和歌山県知事、在日インド大使、高野山宗務総長などが出席して、インドから八十人の団体を迎え大々的に行われました。

ナグプール出身のフアドナヴィス州首相は、あいさつで佐々井上人の事跡を紹介し、日本との縁を強調していました。除幕式ではインド人仏教徒の「ジャイ・ビーム！」の掛け声高く、アンベードカル博士に対する尊敬と感動の気持ちが現れていました。

高野山大学はアウランガバードの Dr. アンベードカル・マラーサワダ大学と交流趣意書を取り交わしています。これを機に、アンベードカル博士のことが日本で紹介され、またその後継者たる佐々井上人への注目も高まってほしいと思います。

(佐伯隆快)



シルプルより。

インド・シルプル在住
平野文興（大頭龍興）

(2)

10月13日 インドに来たことのある方はご存知でしょうが、インドへ来た日本人が先ず挑戦しなければならないのは、暑さ、でもなければ、食べ物辛さ、でもなければ、下痢対策、でもなければ、乗り物や 買い物時の料金交渉、でもなければ、そうです。トイレです。

インドにはおよそ二億五千万の所帯がある様ですが、大まかに捉えて、そのうちトイレがある家は48%、野外で用を足す人が50%、公共トイレが2%くらいのようなのです。

まさに、日本人の感覚からすると最悪です。

食う、寝る、出す。これは植物はいざ知らず、我ら動物にとつて生きていくためには、絶対の必要条件です。

出したもの、これは不衛生です。皆わかっていますから、昔から人類は、その処理に知恵を働かせてきたのでしよう。しかし、ここインドはどうもこの事については余り気にしてこなかったのではないだろうか？と思います。

この数字は数年前のもので、現在は少

しは変化しているとは思いますが、人口の多い国ですから急激な変化はないと思います。

今、モディ首相もトイレの問題には頭を悩ませている様で、「トイレを各家庭に設置する様に」と号令をかけている様です。

しかし、特にこの国ではカーブと絡みもあり（人口の内、ブラフマン35%、クシャトリア5.5%、ヴァイシヤ6.5%、シュードラ85%である、と七十歳過ぎの元学校の先生だったという方に教えてもらいました）、昔からの習慣はそうは簡単に変わらないのではないかと感じています。

ですから、インド国民の大半を占めるシュードラの仕事とされているトイレ掃除の仕事が無くなり、収入を得る手段が無くなると考える人たちが非常に多いらしいのです。ましてここシルプルは、都会から離れた人口千五百〜千六百人の寒村です。佐々井上人のおかげで貴重な遺跡が発見され、政府も、道路の整備や、観光資源としての遺跡の管理に 力を入れて、人口も次第に増えている様ですが、家は増えても各家庭にトイレのある家は、この数字よりはるかに少ないだろうと想像できます。

このところ雨季も過ぎた模様で、私は朝夕が涼しくて気持ちがいいので、時々朝、明けきらないうちに散歩に行く事が

良くあるのですが、朝早い時、多くは女性に出会います。彼女達はサリー姿で、小さな水桶やペットボトルを持っていきます。ご想像の様に、彼女達は茂みに入っていく、用事を済ませてくるのです。

もう少し時間が過ぎると、今度は男性の姿が増え、同じ様に水をもって歩いていきます。

さらに時間が過ぎると、子供達が出てきます。でも小さな子供達は茂みには入らず、道の脇で堂々とやっています。

ある時、都会であつても見かけたのですが、たくさんの人通りの中、おじいさんが道の側溝をまたいで用を足しているのを見たこともありました。

まあ考えようによっては、家にトイレを作つても、個室で嫌なニオイに我慢しながら時を過ごすより、大自然の中でゆつくりと時を過ごしたほうが、余程快適だろうとは思いますが……(一)

私の幼かった頃、家にトイレはありませんでしたが汲み取り式で、ニオイはするし、時にはお釣りをもらう事もありました。汽車に乗れば、そのトイレからは下の線路が見えていましたから、排泄物はもろに落ち、小便などと一緒に、後方の開いている窓から、風に乗って飛び込んできたものです。

インドの列車がまさしくいまこの状態です。以前インドの旅で、窓際の座席に

座っていました。吹き込む風が気持ち良く、流れる景色を眺めていた時、「あれっ、雨でも降ってきたかな？」と思つた時がありました。すぐ止んだので「なんだ、通り雨か？」と思つたものでしたが、あれは多分、トイレの誰かの落し物が顔にかかったのだろうと、今では思つてます。もしインドの列車に乗つた時、窓際に座るのでしたら、進行方向に背中を向けて座る事をお勧めします。

また、インドの列車はクラス分けがされて、たしか六〜七段階あつたと思えます。長距離列車は十五〜二十両位でかなりの長さです。そしてそれらの車両同士は行き来出来ません。窓には、窓からの乗り込み防止用の鉄格子がはまつています。

私が、最低クラスの自由席に乗つた時の事を記します。

車両の照明は薄暗く、下を見れば座席は勿論、通路にもぎつしりと人が詰まつて、車両そのものが空間の少ない、人間のつくだ煮状態です。こんな状態ですから、トイレに行きたくなつたら大変です。多分トイレの中にも初めから人が詰まつているでしょう。ですから、列車が駅に止まると、昇降口で用を足そうという人で大混雑になります。座っている人たちが踏みつけながら、ようやく外に出て、ホームの反対側の線路に向かつて大

勢の人が、正月の出初式の放水合戦のような光景となります。列車もこのことを見越してでしょう。各駅に十〜十五分位止まっていたと思います。女性は男性の様にはできないので、ホームの端の方へ行つて用を足していた様でした。

用を足し終わつて乗るのもまた大変で、入り口に陣取っている人たちの隙間に足を差し込んで、一步一步、元の席に戻らないといけません。時折、何やら怒鳴られます。私は履いていた靴が脱げてしまいました。

インドは列車でも、家の中でも、基本は同じように、個室にしゃがみ式の便座、左側の壁に水道の蛇口、蛇口の下に手桶、又は空き缶が置いてありますが、当然、紙はありません。

すでにみなさんご存知の様に、「神(紙)に見放されたら、自らの手で運(ウン)を掴め」であります。

用を済ませたら、おもむろに備えてある桶又は空き缶に水を満たし、右手でそれを持つて、左の指で自ら運を掴みます。そして、せっかく掴んだ運を、桶から少しづつ水を左手にうけながら流していくという作業を繰り返します。便器のものも当然、流さなければいけません。

ですからインドでは、左手は不浄の手ということで、食事の時はおつぱら右手だけで食事をするのでしよう。

便器のものも流さなければいけませんと書きましたが、私の行った公衆のトイレとなると、全て、それは成されていませんでした。駅なども同じくひどいものです。どのドアをあけても、ほとんどっこりと残っているのです。観光地のトイレとなると、もうひどいもんです。水の出ないところもあります。床はゴミだらけ。絶望的です。仕方が無いので、他人様の残していったその上に、自分のものを負けるもんか！と盛り上げて行くしかありませんでした。これらの掃除の仕事が、シュードラの収入源となつていようなのです。

何だか下品な話でいけません、これは事実なのです。



高級ホテルはこんなことは無いと思いますが、私は利用した事がないので、分からないのです。

ですから、インドに初めて来られる方は、どうぞ一度、ご家庭でシャワートイレやトiletトパーを使わないで用を足す、という体験されてからおいでになると思います。

余談ですが、永平寺の入門修行者は、まず、先輩の僧から「紙は使うな、このようにしろ」と教えられ、ステンレスのコップに水を入れて個室に入ります。皆その体験をします。道元禅師の教えのなかに、そのときどの様にするのか、こと細かく指示されているからです。

インドを感じるには、「神に見放されてしまった己の運を自ら掴めるか？」この一線を越える事ができるかどうか、ある種のターニングポイントではないかと思えます。

トイレ事情だけではなく、その他インドで出会う様々な出来事により、今まで持っていた常識がひっくり返り、異次元の世界に入った様なインドの魅力が、その味わいが、より印象的に深まると思います。

勇気を持って、インドを味わって見ませんか？

シルプルより。平野 龍興

ブッダガヤ大菩提寺 管理権返還運動を 支援しよう (佐伯隆快)



インド、ブッダガヤの大菩提寺は、釈尊が覚りを開かれた地上一所の現当地であり、全世界仏教徒の拠り所とする仏蹟第一の根本道場である。

仏滅後、アシヨールカ王の時代に釈尊が吉祥座を敷かれた菩提樹の幹を囲んで欄楯が廻らされ、その座には幾何学文様を刻した石造りの台座が設けられ「金剛宝座」と呼ばれるようになった。歴代の王朝は八大仏蹟中第一の遺跡として尊重し、多くの人々が訪れて、徐々に大菩提寺（マハーボーデー寺）として整備された。七世紀にインドを訪れた玄奘三蔵は、正方形の基壇の上に大塔と四小塔が聳えるほ

ぼ現在見るかたちの精舎に参拝している。しかし、十三世紀初頭に東インドに侵入したイスラム軍は、各地の仏教施設を次々と破壊し、仏教は壊滅的な打撃を受ける。ブッダガヤの大菩提寺は、尼蓮禅河の砂を盛って、五十三メートルの大塔を覆い小高い丘に模して、イスラム教徒による破壊を免れた。

それ以後、仏教徒の消えたインドの大地で砂にうずもれた大塔は、その所在さえ分からなくなっていた。

およそ六百年後のイギリス統治下、インド考古調査局長官アレキサンダー・カニンガムは、法顕の『仏国記』や玄奘の『大唐西域記』などをもとに各地の仏教遺跡を調査して、大菩提寺の場所を特定し、一八八〇年大規模な発掘を行い、砂の中から大塔が姿を現したのであった。ピルマの王室の援助などにより大塔や金剛宝座、周辺の遺跡が修復され、アジア各国の仏教徒がはるばる参拝するようになった。

ところが、ブッダガヤ一帯の土地は、一八世紀初めより、ヒンズー教シヴァ派のバラモン、マハント一族が支配するところとなっており、大菩提寺の境内でヒンズー教の供儀が行われたり、シヴァリంగా（シヴァ神の男根）を祀るなど、仏教徒には容認しがたい状態であった。

一八九一年一月、釈尊成道の地を訪れ、その金剛宝座に額づいて自ら仏法の守護

者となることを誓ったスリランカの仏教者、アナガリーカダルマパーラは、同行していた日本人僧侶、釈興然と共にブツダガヤに留まり、マハントと交渉して大菩提寺の土地の買収を試みた。現地状況を調査して、「大菩提会（マハーボーディンサエティ）」を設立し、各国の仏教徒に呼びかけて、大菩提寺の仏教徒への返還運動を開始したのであった。

釈興然は自らをインドに派遣した釈雲照律師に報告し、日本でもこのインド仏蹟復興運動が盛り上がり、買収資金五千万円（一万ルピー）現在の数千万円）のうち千円を集めて、大菩提会主催の国際仏教会議に出席する真言宗僧侶、阿刀宥乘に託した。ダルマパーラは、タイ、ビルマ、本国スリランカの仏教界に働きかけて資金援助を求めたが、各国の思惑に翻弄されてまとまりがつかず、マハントとの交渉も進展せず、そのうち日露戦争に勝利した日本のアジア進出を警戒したイギリスのインド総督が介入して、話是有耶無耶になってしまった。

一九四七年、インド独立。ネルー首相は国旗に仏教の法輪を採択し、全インドの仏教遺跡の保護を推進した。大菩提寺は新たにブツダガヤ管理委員会の管理となり、委員には仏教徒四名、ヒンズー教徒四名、そしてガヤ地区長官（ヒンズー教徒）の計九名で構成される寺院法が制定された。この法律により、結局ヒンズー

教徒が多数を占める管理委員会が、大菩提寺を管理することになり、ヒンズー教の儀式も継続され、世界中から訪れる仏教徒や観光客からのお金は、マハントの地元ヒンズー教団体に流れるという状態が続いた。現在もそうであるが、観光地と化したブツダガヤでは、あやしい物売りやスリが横行し、治安は非常に悪くなっていった。

一九五六年、仏陀生誕二五〇〇年を祝うブツダジャヤンティの年、インド政府はブツダガヤに国際仏教センターを建設し、日本寺やタイ寺など各国の施設が建ち並んだ。この年、インド初代法務大臣のアンベードカル博士は、ナグプールで五十万人の不可触民と仏教徒に改宗し、インド仏教は復興の烽火を上げた。

アンベードカル博士の後継者となった佐々井秀嶺師は、全インド比丘サンガの代表となり、いまや一億人ともいわれるインド仏教徒を率いて、大菩提寺を仏教徒に返還する大デモ行進を十数回実施し、自らも管理委員に名を連ね、一九四九年のブツダガヤ寺院法の無効を訴える裁判を起し、歴代首相、ビハール州知事と度々会見し、あらゆる平和的な手段を以て「大菩提寺奪還闘争」を取行した。しかしインドの八割を占めるヒンズー教勢力の代表である政府の要人たちは、言を左右して仏教徒たちの要求を受け入れようとしない。二〇〇二年一月に佐々井師

らは、国連のアナン事務総長に書簡を送り、大菩提寺大塔の管理権が仏教徒に完全移管されるようインド政府に働きかけて、世界中の仏教徒に対して正義を示してくださるようにと請願している。「その決定は全世界に公正と平和と思いやりの理念を広めて行くのに多大の効果を發揮する。故にわれわれは国連に一九七二年十一月十六日に採択され、一九七四年十二月十七日に発効した世界の文化・自然遺跡の保護（ユネスコ）に関する条約を活かすよう求めたい」と訴えた。これが機縁となり同年六月、ブツダガヤ大菩提寺はユネスコの世界文化遺産に登録されたのである。

それでもまだ、釈尊成道の最勝地は我ら仏教徒のもとに還つてはいない。世界は混乱している。全世界の仏教徒が、心を同じくしてこの金剛宝座に集い、世界に仏陀の誓願を示す日が来るのはいつなのか。大恩教主釈迦牟尼仏の恩に報いるには、私達仏教徒一人一人がこの問題を直視しなくてはならないと思う。

現在佐々井師は、一九四九年のブツダガヤ寺院法（大菩提寺管理委員会規則）の無効（インドでは一九五〇年以前の法律は無効とする法律がある）を訴え、その適切な改正を求める裁判を係争中である。管理委員会の人員構成を仏教徒中心にすることに向けて、なおビハール州、

インド政府へのアピールが必要となる。いままで日本仏教からの正式なアピールは、二〇〇五年の臨済宗・黄檗宗連合各派合議所アピールのみである。（写真集『日本行脚』巻末に全文掲載）

いま一度、全日本仏教各宗が結束してこの問題を認識し、インド政府、ビハール州政府への提言陳情を行って、佐々井師の奮闘に報い、全世界仏教徒の悲願を成就すべきである。南天会関係者各位には、それぞれの立場から各宗派議会への働きかけを行っていただきたい。

『龍族』では、会員様各位からの寄稿を 随時受け付けております。

佐々井上人に対する思い、研究の成果など、皆様からの自由な投稿を受け付けております。写真も添えて頂きますと、より見栄えのする記事となります。

- ・原稿は事務局宛にメールまたは郵送でお送り下さい。
- ・原稿料等はお支払い致し兼ねますので、予めご了承下さい。

南天会会計報告 (2015.7.14—11.18)

月	日	摘要	収入金額	支出金額	差引残高
7	14	前期繰越金			614,911
7	15	一時帰国経費清算		170,800	444,111
		タクシー代 (7月2日)		(7,310)	
		長野往復交通費 (7月3～4日)		(34,510)	
		長野滞在経費 (7月3～4日 入場料、食事等)		(7,300)	
		大正大学対談講師謝礼 (7月5日)		(20,000)	
		大正大学対談スタッフ経費 (7月5日 昼食他)		(5,074)	
		帰国飛行機諸手数料 (7月7日 座席変更等)		(21,890)	
		デリー～ナグプール航空券 (2名)		(24,252)	
		資料室荷物運搬費用 (7月14～15日) ※1		(41,524)	
		その他 (佐々井上人散髪代、食事代等)		(8,985)	
8	14	大正大学対談チラシ・ポストカード作製支払		24,440	419,671
8	14	振込手数料		216	419,455
8	14	インドへ本発送		6,300	413,155
8	25	龍族4号作製		46,100	367,055
8	25	南天会封筒 (大) 作製		8,700	358,355
8	31	龍族4号発送		43,525	314,830
9	10	会費・特別支援金 (現金)	280,000		594,830
9	17	会費 (現金)	10,000		604,830
9	27	大正大学対談経費精算		144,280	460,550
		『必生～闘う仏教』50冊仕入 (6月25日)		(29,500)	
		『夜明けへの道』50冊仕入 (6月25日)		(54,800)	
		大正大学対談案内発送 (6月28日)		(58,480)	
		大正大学対談案内コピー代 (6月28日)		(1,500)	
9	27	天来書院より (7月5日) ※2	3,700		464,250
9	27	会費 (現金)	30,000		494,250
9	27	交流会書籍売上	20,000		514,250
10	1	南天会郵貯口座利子	84		514,334
10	6	会費 (振込口座より)	600,000		1,114,334
10	8	インドへ送金		1,000,000	114,334
10	8	インドへ荷物発送		4,300	110,034
11	18	会費 (振込口座より)	81,000		191,034
11	18	書籍売上 (振込)	12,500		203,534

※1 = 佐々井上人の指示により、インドでの活動記録 (VHS ビデオ 300 本) 等を日本に運搬しました。

※2 = 大正大学対談会場での関係書籍売上の一部を寄付いただきました。

[インドでの支援金使途について]

今年度のインドへの支援金として、6月の一時帰国滞在支援金残金と本年度会費の中から10月8日に100万円を送金いたしました。南天会からの支援金は、主に現地の龍樹菩薩記念研究協会経費の一部として使用されています。その内容は、龍樹菩薩大寺・文殊支利菩薩大寺・有方静恵老人ホーム・コンダサワリ診療所の管理費用／シルプール遺跡・マンセル遺跡の協会所有土地管理費用／ブダガヤ大菩提寺管理法裁判費用／協会人件費 等です。

南天会は、 人材をインドに 派遣します。

《各種お振込先》

【金融機関名】 ゆうちょ銀行

【加入者名】 南天会

【口座番号】

01380-0-90164

(払込専用口座)

《ご入会をご希望の場合》

郵便局備え付けの払込取扱票にて、住所、氏名、連絡先電話番号 (メールアドレス)、通信欄に会員種類 (支援、一般、学生) をご明記の上、会費を送金ください。会費納入後、確認書類を封書にてお送りいたします。

※領収証が必要な方は、通信欄にその由ご記入ください。

【会員種類と年会費】

支援会員 10,000 円以上/年

一般会員 5,000 円以上/年

学生会員 2,000 円以上/年

(※大学生まで)

南天会のご周知・ご吹聴にご協力ください

パンフレットなど必要な方は事務局までお知らせ下さい。PDF版は南天会ホームページ「南天会について」よりダウンロードできますので、各自印刷の上ご利用下さい。

(南天会事務局)

〒710-0004

岡山県倉敷市西坂 1582-1 一心念誦堂内

TEL/FAX 086-463-9391

佐伯隆快 (090-5304-8955)

小林三旅 (090-4538-2677)

メール nantenkai@gmail.com

URL <http://www.nantenkai.org/>

最新情報は
Facebook『佐々井秀嶺資料室』
をご確認ください。



日頃より南天会の活動へのご理解と多大なるご支援を賜り、衷心より御礼申し上げます。

記事にて述べました通り、佐々井上人は大改宗式導師という重責を、今年も立派に果たされ、その健在ぶりを我々は目のあたりにしました。しかしながら昨今、上人の健康面を不安視する声も高まっており、できることなら間近でお世話して差し上げたいと名乗り出て下さる方もいらっしゃいます。

そのような声を受け、南天会では佐々井上人の健康管理および雑務の補助を目的とした「滞在支援」要員の派遣を検討いたしました。日本食の調理など健康面の補助、また日本との連絡を密にすることを主な任務とし、一人の滞在期間を1～3ヶ月、交代で継続できればというのが、現実的かつ最良のプランであると考えています。しかし、資金面の課題を乗り越えなければ持続性を持たせることが難しいのも事実です。

これまでにない積極的な支援に乗り出すために、是非とも皆様のご理解とご賛同を頂きたくお願い申し上げます。

◆◆ 滞在支援 渡航費カンパのお願い ◆◆

1人派遣するにあたり、【往復の渡航費15万円+保険】が最低限必要であると見込まれます。持続的支援の実現のため、ご寄付をお願いいたします。

ご寄付頂けます方は、同封の振込用紙にて左記口座にお振込下さい。一人でも多くの方のご支援をお待ち申し上げます。

※その他ご支援(特別支援)につきましても、時期、金額を問わず随時お受け致しております。左記口座にお振込下さい。なお、ご入会を希望せず、ご支援のみの方は、通信欄に「入会不要」とご記入下さい。

第5回 南天会交流会のお知らせ

10月の大改宗式に参加した事務局小林によるレポートと、ナーランダ大学の中村龍海さん(年末年始一時帰国中)にマンセル遺跡考察を発表していただきます。また会計報告詳細、人材派遣や大菩提寺返還運動についても会員同士で話し合います。2月の旅行企画の説明も行います。参加無料。お誘い合わせの上、是非ご参加ください。未入会の方も歓迎です。

・日時：12月19日(土) 14:00～

・場所：^{しんじょういん}真成院 東京都新宿区若葉2-7-8

(東京メトロ四谷三丁目駅または四谷駅下車

徒歩7分)

・電話：03-3351-7281

・交流会参加費：無料、申込不要